

「『週刊金曜日』について」

2017年12月02日

『週刊金曜日』の12月1日号に、私の下記の投書が掲載された。『週刊金曜日』の編者、記者たちは優れた識者であろうが、日頃感じていることを率直に書いた。内田樹氏は、素人の声を尊重すべきだというようなことを書いていたが、素人の私の奔放な批判を受け入れてくれ、驚いている。私には識者と識者とは言われない人との区別はない。書いたことは私の信仰告白で、思うことを言い続けたいと思っている。

「『週刊金曜日』にニヒリズムを見る」

『週刊金曜日』の購読者が3分の1に減少したそうである。残念なことだが、そうだろうな、との思いもある。私は発刊当初から愛読し、多くのことを学び、感謝している。購読しようと思ったのは、久野収氏や筑紫哲也氏が関わっていたからだ。両氏の書かれたものや言葉に懐の深さを感じていた。それは、人間に対する愛情であろう。

ラジカリストにはニヒリズムの臭いがする。ニヒリズムは人の心を動かすことができず、将来の展望も示すことができない。中国文化大革命の「紅衛兵」、日本の全共闘の主張は、今日から見ても、真実を内包していたと見ることができる。しかし、彼らは主張の正当性に溺れ、人間に対する愛情を失い、破壊的なニヒリズムに陥ってしまった。

最近の『週刊金曜日』にはニヒリズムが漂う。政治や社会の出来事を捉え、公平と正義を追求する論述は理解できる。しかし、人間に対する愛情が見えてこない。表に表れた情報に流され、生きて、苦悩している人間の姿が見えないからである。徒な批判のみで、否定的な言葉しか聞こえない。否定的に言うことが、リベラルで、物知りであるかのような書き方である。そこでは、創造的な展望は解き明かされないであろう。

人間は皆、身体を持ち、時間の中で生きている。そこに、社会の力の論理によって、理不尽に扱われる苦悩と悲しみが起こってくる。その実態を浮かび上がらせることが、まず、大切ではないか。それが、人間に対する関心であり、愛情である。それを捨象したところで、いくら公平や正義を振りかざしても、言葉は虚しく響く。

辺見庸氏は『反逆する風景』で、ソマリアで出会ったファルヒアという少女のことを書いている。避難民収容所に辿り着いた彼女は枯れ枝のようにやつれ、食べ物も口に入らず、座り込んで、虚空を見つめているだけである。他人の苦しみを背負い、死に呼び込まれようとしている彼女に、辺見氏は、大慈大悲で苦海の衆生を済度する観世音菩薩を見て、ここに、世界の中心があると確信したという。ホワイトハウスや首相官邸ではなく、ファルヒアに世界の中心があるという認識が、人の心を捉え、社会を動かしていく。

立川談志は、落語を「業の肯定」と言ったそうだが、罪を犯さざるを得ない人間を愛する中から、現実には繰り返り広げられている実態を鮮明に捉え、伝える。そこに、人の心に響く言葉を見出し、やるべきことが見えてくるのではないか。

ニヒリズムから抜け出た、人を生かす言葉を紡いでいく変革を望んでいる。

若い頃、私は自分の生を肯定することができなかった。それは、必然的に他人や社会をシニカルに見てしまう。聖書を読み、主イエスの十字架と復活に罪の赦し、「生きてよい、生きよ」との是認の言葉を聞いて、生きる勇気と他人への関心を持てるようになった。それが私の救いであった。本を読む時、著者が人間への愛情を持っているかどうか、最大の関心を寄せている。上から目線の批判は皮膚感覚として受け入れ難い。共に生きようと苦悩する中に、他人と社会への愛情が見えるというのが、私の視点である。